こんにちは

神山えつこです　No.121／2006.6

発行：日本共産党郡山・安達地区委員会
〒963-8866 郡山市桑野清水台48-8 後藤ビル1F ☎922-3801 FAX932-1903
Eメール jp-ko-ada@hotmail.co.jp

お産を守れ、女性産科医へ支援を

神山県議、県議会で要求

「出産できる場所がない」という悲鳴は、出産を控えた人たちだけでなく、大きな社会問題となっている。過酷な勤務、医療ミスと訴訟などで産科医はどんどんやめていく。特に産科は女医の割合が高いのにそれを支える環境がなくやめる人も多い。

福島県は産婦人科医の逮捕、産科病棟の激減など問題が集中している。この問題で日本共産党は連携して取り上げているが、神山県議、高橋千鶴子衆議院議員、佐藤力国見町長の発言を紹介します。

出産の場急減
1年半で8%
地域拠点
破水…山を抜け1時間
都会の病床パンク状態
奪われる
産科医不足が深刻
「お産を守れ」母親ネット
署名集め産院存続の声も

女性医師に働ける環境を

2月県議会総括質疑

神山県議：県立大野病院の医療事故によって産婦人科医の不足はさらに深刻になる。女性医師の働ける環境が十分でないので、それを改善して活躍できる環境が必要ではないか。

我々も汗をかいて努力する

副知事：女性医師が結婚されてやめてしまうこともあるが、そういった女性医師も働ける環境を作っていかなければならない。我々としても、もう一汗かいて努力したい。

医療改悪法案の

衆議院福島公聴会

五月八日

女性医師は仕事と育児で悩んでいる

佐藤力国見町長：町内の薄田公立病院で県内の女性医師にアンケートを行った。仕事と育児で悩んでいる80%、保育施設が欲しいが83%あった。女性医師は働きやすい場所を求めている。国の支援制度があればありがたい。

県内の産科医は危うい状況

高橋千鶴子衆議院議員：県立大野病院の産婦人科医の逮捕事件は、県内でいつ、どこで起こってもおかしくない状況だ。危うい状況にある。

批判殺到の産科医逮捕はお手柄？
県警本部長表彰について質す

大熊町の県立大野病院の産婦人科医が医療過誤容疑で逮捕された事件で、県警察本部は逮捕した高岡署を表彰した。

神山県議は政調会で、亡くなられた患者にお悔やみを申し上げるとともに、事件も確定していない段階で、県警が表彰するのは問題ではないかと、県警本部長に質しました。

福島県は
産科医減少数日本一！

一年半前に全国に産科病棟は一六六五ヶ所あったが、現在そのうち一三八ヶ所が分娩を中止しています。

県内には一年半前は四〇の産科病院があったが、現在は二九に減っている。この数字は全国一の減少数になっています。

郡山から見た 県政ア・ラ・カルト

100年前の郡山 と 二人の作家

◆宮本百合子・久米正雄が残したもの

「貧しき人々の群」「阿武隈心中」90年

宮本百合子と久米正雄という二人の作家は郡山市民と深く結びついた存在であり、現在も市内の中学生の優秀な文学作品には、女生徒は「百合子賞」、男子生徒には「久米賞」が贈られている。二人が作家として世に認められるようになったのは奇しくも同じ一九一六年（大正5）の百合子「貧しき人々の群」、久米「阿武隈心中」の発表によって。今から九十年前▼作品の舞台は郡山町（当時）の近郊。百合子は西の桑野村、久米は東の小泉村で共に農村地帯。当時の郡山は開業による安積開拓により、水と電力が充足し、急速に工場や産業が発展した時代。だが農民農村はその裏で没落し、劣悪な条件の労働者が誕生した。二人の若い作家はその過酷な現実を鋭敏に作品に結晶させた。

◆「女工哀史」の時代への回帰

小泉改革「格差社会」の終点

二つの作品に描写された郡山の百年前は女工哀史の時代だが、現在の日本社会の姿とも重なる。農業で食べられず、都会に出れば株で失敗。農村にいても高利貸しに追い回される。労働者になっても低い地位での不安定雇用にリストラ。最後は自殺か心中、酒に酔い事故死。「百姓してもんはおら等が代でお終い」「此頃のように軋み合っては、生きてられねえ人も出来て来るんだべえよ」▼小泉改革を「社会主義といえるほど規制でがんじがらめだった日本社会を、資本主義の本来あるべき姿に変えるための改革」とナポーターは持ち上げる。だがこの二つの作品は、「無慈悲きわまる野蛮さで、もっとも恥知らずで汚らしくて、もっとも貪欲で憎むべき欲望の衝動によって遂行される」（資本論）資本主義創成時の本来の姿を活写した。

◆「東京は卒業だ、田舎の空気は旨い」

だが、一寸待って、団塊の世代

最近のテレビでこんなCMが見られ、定年を目前にした団塊の世代を田舎に住むのも悪くはないと誘う。県内でも盛んだ。荒れた桑畑を起こして無農薬野菜などと。だが、現在の農村の荒廃と地方の貧困は、高度成長を至上とした日本資本主義の必然の産物であり、それを支えてきた団塊の世代にも責任の一端▼この世代は「会社」のためには滅私奉公だが「社会」の問題にはノータッチだったとの批判も。競争と効率化の暴風で沈もうとしている農村に、元企業戦士が楽園を求めても問題は解決しない。平和な時代を生抜いた世代の責務として、これからは、平和のために共に生きるとは何か、「社会」のために頑張るとは何かを自らの課題にすべきだ。ツバ打ちや陶芸・家庭菜園だけの余生では余りにも侘びしい。（S）